

記 事

消 息

第20回日韓東洋医学シンポジウム

松岡 尚則^{1,2,3)}, 頼 建守^{4,5)}, 山口 秀敏⁶⁾
 笛木 司⁷⁾, 並木 隆雄⁸⁾

¹⁾ 東邦大学総合診療・急病講座, ²⁾ 高知総合リハビリテーション病院

³⁾ 財団法人研医会, ⁴⁾ 東京医科歯科大学, ⁵⁾ 新宿海上ビル診療所つるかめ漢方センター

⁶⁾ 信州医療福祉専門学校, ⁷⁾ マツヤ薬局, ⁸⁾ 千葉大学大学院医学研究院和漢診療学

平成24年(2012)9月14日～16日第16回国際東洋医学会が大韓民国ソウルCOEXで行われた。これに合わせる形で、第20回日韓東洋医学シンポジウムが、COEX 208B室で開催された。会場のCOEXはソウルの江南にあり、貿易センタービル、ホテル、百貨店、都心空港ターミナルなどの主要施設と隣接している商業文化複合施設である。

裴元植(以下敬称を略)により、第12回日本東洋医学会学術総会(1961, 京都)から戦後の日韓の東洋医学の交流は始まった。裴元植は、当時、大塚敬節、矢数道明、細野八郎らと交流を持ち、韓国から日本東洋医学会学術総会に一回もかかさず代表団を構成して参加された¹⁾。

また、日本と韓国の2国間の東洋医学会のシンポジウムについては、1981年第2回国際東洋医学会のあり、名古屋地区と韓国の東洋医学会とで友好姉妹結成がなされ、10年ほどシンポジウムが開かれていたが途絶えていた²⁾。

組織・人が変わって、2004年から始まった日韓東洋医学シンポジウムもすでに20回を数える。日韓東洋医学シンポジウムは、日本東洋医学会総会、国際東洋医学会、韓国の学会などの日程に合わせる形で開催されてきた。テーマは両国の研究者によってその都度、時宜を得たものが選ばれ成果をあげてきた³⁾。今回の第20回日韓東洋医学

シンポジウムでは韓国からは、慶熙大学韓医科大学学長の金南一とソウル大学校医科大学人文医学教室、金正善韓医院の金正善の2名が、日本からは安井医院の安井廣迪の発表がなされた。

安井廣迪は「許浚活躍時代の日本の医学」という演題で2つの部において発表された。第1部では「曲直瀬道三・曲直瀬玄朔の医学を中心に」と題して発表を行った。曲直瀬道三(1507-1594)、許浚(1539-1615)、曲直瀬玄朔(1549-1631)の各生没年と著書から、参考とした医書にも時代の差があること。『東医宝鑑』は医学全書で、『啓迪集』は病門別の説明書で治療に特化していることを説明された。また、『啓迪集』はシェーマ方式という、もともと仏教の経典で行われた方式で記載されており、朝鮮・支那での文章で記載する方式とは異なることが示された。そして、一連の曲直瀬道三の著書が説明された。また、第2部として、朝鮮通信使と日韓の医学交流という題で、奇斗文と北尾春圃について触れられた。

金南一は「東医宝鑑と東アジア医学—東医宝鑑以後朝鮮医学潮流—」の発表を行った。許浚の経歴、『東医宝鑑』の著述過程、著作者たち(鄭碯, 楊禮壽, 許浚), 東医宝鑑の日本・中国の版本, 韓国医書の系統, 韓医学の学派について発表された。また、日韓医学交流の歴史として、新羅からの金波鎮, 高句麗からの徳來, 呉の知聰が内外典,



図1 「韓国韓医学の学派」を説明中の金南一学長（慶熙大学）

葉書、明堂図等164巻を持ち高句麗を通過して日本に帰化したこと、医方類聚、文禄・慶長の役、朝鮮通信使を紹介した。

金正善は「朝鮮王家の医療」と題して、内医院の制度、職制、東闕図の昌徳宮の内医院について説明を行った。また、朝鮮国王達の健康管理として、補法を中心に行なっていたことが報告された。『欽英』丙午年（1786）7月6日には「世の医院の処方には必ず人参・鹿茸・桂皮・附子が出てくる。このようにしないと患者とか隣で見ている人がみんなそれを薬とは思わない。」と書かれ、補法を中心に治療する状態が朝鮮後期の医療には一般的にみられたとした。純宗の食事は1日4-5回のうち2回は正食という食事を行なっていたことを紹介した。また、文宗、正祖は感染性膿瘍と考えられる腫気を発症していた。さらに、小池正直（1854-1913）による済生医院の外科患者（1883-1885）では、朝鮮人では炎症による外科疾患が一番多かったのに対して、日本人では外傷が多かったなどの資料が紹介された。

シンポジウムでは質疑応答ともに活発に行われた。専門的な内容が伴うような質疑応答があったが、日本語・韓国語の両方に翻訳されたテキスト・スライドが準備され、全般としてスムーズな運営が行われた。司会の吉富誠・金英信による通訳の貢献は大であった。主催の韓国東洋医学会、および、日韓東洋医学シンポジウム実行委員会の方々の熱意と努力に感謝を申し上げ、労をねぎらいたい。

文献

- 1) 金英信：日韓伝統医学交流の経験，日本中医学会 学術総会抄録集，p.26-27，2011
- 2) 日韓東洋医学シンポジウム開催，漢方医薬新聞，394（7月5日号），2008
- 3) 安井廣迪：第15回国際東洋医学会開催さる，ISOM Japan ニュースレター，1，2010